

5 人間の身勝手さを省み、戦争をなくすためにできることを考える (リプりんと・ネットワーク理事 南 秀郎 76歳)

『ひとりぼっちのさいしゅうれっしゃ』いかがでしたか。これから、おじいさんの子ども時代のお話をします。

私が「リプりんと・すぎなみ」在籍中、「リプりんと・すぎなみ」の月例会において、テーマを決めてグループ毎の発表が行



『ひとりぼっちのさいしゅうれっしゃ』

いわむらかずお／作
偕成社

山奥の夜行列車に動物たちが乗りこんできた。そして口ぐちに人間の身勝手は許せないという。自然の大切さを語るファンタジー絵本。(出版社 HP より)

- 発行: 1985年12月
- ページ数: 72ページ
- ISBN: 978-4-03-963250-0

なわれていました。そこで、私の所属するグループが『ひとりぼっちのさいしゅうれっしゃ』を取り上げたことができました。その時以来、この絵本の発信する内容に少々心に引つ掛かるものがありました。それは忘れてはまたひよいと思いつくといった類のものでした。私の心や頭を過ぎるものは何だろうかどうしてなんだろうかその謎が少しずつ解けて形を作りはじめたのは今夏、国会で成立した、いわゆる「安保法制」だったかもしれません。

僕が生まれた頃、日本は中国大陸で戦争をしていた。(このことは、大人の会話が理解できるようになってから知ることになったのだが。)そのため、鉄は船(軍艦等)、飛行機(戦闘機・爆撃機・輸送機等)、機関車、線路、橋、トンネルの資材として欠かせないものだった。けれども、鉄鉱石は日本の国土には埋蔵量は無いに等しかった。石炭は船を動かし、鉄を溶かすのに必要だった。石炭は北九州、常盤、北海道に埋蔵されていたが、その量では不足。中国大陸には鉄鉱石、石炭の埋蔵量も多く、日本は

その資源を必要としていた。飛行機の燃料となる石油はアメリカ合衆国から輸入していたが、輸入量には限界があるとのことだった。

日本は石油を求めて、東南アジアや南洋諸島に軍隊を送り石油の産出量を確保しようとしたが、アメリカ合衆国は日本がそれらの地域へ軍隊を送ったことを知ると、日本へ石油の輸出を止めた。このことも後から知ることとなった。昭和16年12月、日本はアメリカ合衆国を相手に戦争を始めた。昭和19年になると、日本各地でアメリカの戦闘機による機銃照射やB29爆撃機による焼夷弾の投下が始まった。これも後で知ることになったのだが、新聞やラジオの報道では、日本は大きな成果を挙げているのに、空襲があることを不思議がっていた。

空襲が激しくなるだろうとのことで、僕達家族は引越すことになった。このことを疎開と言った。僕達家族は父を東京に残して母の郷里(鳥取市)に疎開した。このことを縁故疎開と言った。

昭和20年8月の初めの頃、鳥取駅から赤十字病院へ重傷を負った人々がトラックで何台も運ばれて行った。同じ8月の暑い日、ラジオの前で大人達が泣いていた。

昭和21年4月、僕は鳥取市立の国民学校の一年生になった。学校ではアメリカ缶詰が給食として配られた。学校では少ししか手をつけずに家に持ち帰った。昭和22年6月頃、僕は中耳炎に罹り、赤十字病院に入院した。

昭和22年の夏、僕達家族は東京に戻り、杉並区に住んだ。小学校は一部授業だった。この秋、僕は中耳炎が再発し、大久保の旧陸軍病院に入院した。その病院には、手足が無い、耳が片方無い、目玉の一つが無い元兵隊さんが大勢治療していた。学校で掛け算の九九を習っているところであったが、僕は同室の兵隊さんに九九を教えていただいた。

戦争は兵隊同士が命を奪い合い、戦地の住民の命を奪い、食料、財産を略奪する。悲惨なことこの上ない。戦争をしないためには武器を造らない、売らないことだ。今も戦争が無くならないのは、武器を造り、売る輩がいるからだ。戦争は絶対にやっちはいけない。戦争をしない、させないために僕に何ができるのだろうか。何をしなければいけないだろうか。小さなことでもよいからできることから始めてみようと思っている。